

佐和田町史 資料編上巻（非売品）

編 集：佐和田町史編さん委員会

発 行：佐和田町教育委員会

発行日：昭和 57 年 11 月 18 日

口絵

序

発刊にあたって

凡例

天正期

- 一 天正二年十一月 矢馳殿季暁、日典上人に寺地を寄進する
- 二 天正十三年三月 河原田城主本間佐渡守、談議所に制札を与える
- 三 天正十七年四月 上杉景勝は佐渡攻め協議のため富永備中守を沢根に派遣す

る

- 四 天正十七年七月 中原妙経寺に遺存する上杉景勝制札

慶長期

- 五 慶長五年七月 山田村片貝羽黒権現社領田刈高書上げ
- 六 慶長五年九月 真光寺村慶長検地帳
- 七 慶長五年九月 市野沢村慶長検地帳（写）
- 八 （欠 年） 中原村慶長検地帳（写）
- 九 慶長五年十二月 市野沢村源兵衛、社人引退にさいし隠居料を乞う
- 一〇 （欠 年） 慶長検地による青野村宝蔵寺の寺地刈高
- 一一 慶長六年七月 佐渡代官河村彦左衛門・田中清六より、鶴子の斎藤勘解由左

衛門宛ての屋敷

諸役免除の書状

- 一二 （欠 年）五月 沢根町専得寺講中あて、教如上人懇志礼状（三通）
- 一三 慶長九年四月 庄内ぬいのしょう・柏崎の藤兵衛など山師たちが、鶴子銀山

古間歩の再開発

を願い出る

- 一四 慶長九年七月 河原田代官支配十六郷の村高目録
- 一五 慶長十一年 佐州銀山諸御直山鍛冶炭・蠟燭渡帳
- 一六 慶長十四年二月 中原本田寺は、寺領三七〇刈分の場所が城の堤になり、替地

を貰う

- 一七 慶長十九年七月 二宮神社棟札

元和・寛永期

- 一八 元和二年～寛永十一年 市野沢村における新田・新田稗年貢・川流れ改め書上帳（写）

- 一九 （欠 年）七月 佐渡奉行鎮目市左衛門より中原長福寺宛ての書状
- 二〇 （欠 年） 山田村屋敷検地帳

二一 (欠 年)	山田村の大豆にかかる年貢書上帳
二二 寛永五年三月 争論となる	山田川の新堰について、山田村と下村の青野・窪田・中原村
二三 寛永五年三月 き神領とした	八幡村八幡宮は氏子を雇い国府川中嶋に五〇〇刈りの田を開
二四 寛永六年十月	数学者百川治兵衛の算道相伝書
二五 寛永十五年十二月 に売却する	沢根村田上の三郎左衛門は一二〇刈りの田を山師片山勘兵衛
二六 寛永二十年五月	八幡の砂垣制札
承応期	
二七 承応元年	河原田八郎右衛門、塩畑製塩を初めて行う
二八 (欠 年) 午七月 慶安期	河原田八郎右衛門、御公方より塩座を請ける
二九 慶安五年四月 する	市野沢妙照寺と近藤沢の後家は大門道普請のため土地を交換
三〇 慶安五年七月 万治・寛文期	西野古岩山吉祥寺の行事木札
三一 万治三年二月 町伊右衛門に払	佐渡奉行御手洗四兵衛、河原田の田屋を代銀七〇二匁で諏訪
	い下げる
三二 寛文六年七月	山田村太郎左衛門と二宮村三郎兵衛が保田平の土地を争う
三三 寛文十年四月 の由、佐渡奉行	京都妙覚寺はお松実相寺・中原妙経寺・塚原根本寺など末寺
	に願書を出す
三四 寛文十一年三月 稗五斗で契約する	田中村久右衛門と忠右衛門は、肥桶の永代ふせ代を麦三斗、
三五 寛文十一年五月 にゆずる	中原若一王子神社の社人矢田理兵衛は、田畑屋敷を弟長兵衛
三六 寛文十二年十月	心誉宗念上人は、山田村宗念堂へ阿弥陀如来を勧進する
三七 寛文十二年十一月 沢村名主七左衛	佐渡奉行所留守居役奥野七郎右衛門田屋敷欠所につき、市野
	門買い求め妙照寺に寄進する
延宝・天和期	
三八 延宝元年六月 亡し、以後取り	山田村羽黒権現のやぶさめは明暦三年に神子対馬が馬上で死
	止めとなる
三九 延宝五年九月	奉行所は鍛冶法度を定め、鍛冶頭石田村清助に通知する
四〇 延宝八年四月 兵衛に返された	鶴子四十物町と牛か首の間にある役人松浦市左衛門屋敷が作

四一 天和三年五月 貞享期	真光寺川一の関江がかり四か村の用水割帳
四二 貞享二年七月	河原田の田屋可信・同半右衛門、妙照寺に庵室を寄進する
四三 貞享四年七月 佐次右衛門に差	中原本田寺は、河原田殿知行状など九通の預り書を真光寺村 し出す
四四 貞享五年九月 元禄期	田中村で稗田直し改めが行なわれる
四五 元禄二年閏一月 売却する	沢根村河内の広教は自分持ちの屋敷・山林のうち三分の二を
四六 元禄四年六月	中原村妙経寺十八世日恵上人の寺由緒など留書き
四七 元禄五年三月 屋を創業する	河原田本町五兵衛は、新町の三郎右衛門家より酒株を買い酒
四八 元禄七年三月 する	窪田・青野両村名主は惣口坂の上、宿継ぎ場を村境いと確認
四九 元禄七年	田中村など八か村の村明細覚書き
五〇 元禄七年五月	河原田川崎屋新右衛門の他町村における田畑屋敷所有高書留
五一 元禄八年六月	青野・窪田・中原三か村の田地用水取決め
五二 元禄八年七月	河原田山と和泉山の境界争いが決着する
五三 元禄十年三月	河原田諏訪神社の神田よろず留書き帳
五四 元禄十五年三月 け出る	鉄砲改めがあり、市野沢蓮周寺は本寺妙照寺に不所持の旨届
五五 (欠 年) 宝永・正徳期	沢根・窪田など御巡見案内帳
五六 宝永元年四月	二宮神社神官森谷家にのこる神道裁許状
五七 宝永三年五月 出、この税が半	市野沢妙照寺は閣殿・庫裏修復のために木材役銀免除を願い 納になる
五八 正徳四年	沢根番所諸役人勤方
五九 正徳六年 享保期	平清水多聞寺より本寺真光寺への願い一札
六〇 享保四年三月 など十人の百姓	河原田山入会秣場につき、石田村など八か村と山田村藤十郎 が争う
六一 享保四年三月	五十里本郷了円の生国出雲崎への帰国願書
六二 享保六年六月 る	五十里本郷など六か村は、入会山の管理につき取り決めをす
六三 享保十一年五月	真光寺川御普請覚書き(写)
六四 享保十七年一月 る	市野沢蓮周寺日應上人、仏像・田地・銀子を妙照寺に寄進す

六五 享保十七年	伊勢の御師三日市太夫手代兵左衛門、河原田自宅にて自殺する
六六 享保二十年十月	上矢馳村久兵衛など、五か村入会秣場の開田を願い出、許可される
元文・寛保期	
六七 元文三年九月	長木の若宮八幡氏子、秣場を新田に開発して寄進する
六八 元文五年七月	鶴子村六左衛門は田畑屋敷を息子に譲り、娘をつれて分家する
六九 寛保元年十二月	二宮村某・二宮神社境内の的立場の木を伐り詫証文を入れる
七〇 寛保元年十二月	西野吉祥寺中興善映法印の吉祥寺縁起
七一 寛保元年十二月	中原談議所奥院修覆のため、中原村・河原田より田地が寄進された
七二 寛保二年一月	沢根村七郎兵衛、家修覆のため雑木の伐りとりを願い出る
七三 寛保二年五月	佐渡奉行田付阿波守、真光寺へ梵鐘を寄進する
延享期	
七四 延享元年八月	長木三か村は干害と水害で半作となる
七五 延享二年八月	上長木ほか三か村、御巡見使に御救免願いの訴状を提出する
七六 延享三年六月	江戸よりの御巡見使宿河原田新兵衛の覚書き
七七 延享四年四月	中原村惣百姓は、名主藤蔵の再任を願い出る
七八 延享五年五月	金北山御堂の禁制札
寛延・宝暦期	
七九 (欠年) 申二月	寛延百姓一揆の総代辰巳村太郎右衛門、獄中より長男・次男あてに遺書をおくる
八〇 宝暦二年四月	河原田諏訪町松村三益、作場通い道を切り取られたと訴え、翌年和談する
八一 宝暦二年十二月	真光寺村修験法道院は、二宮神社より神子免米九斗七合を与えられる
八二 宝暦三年三月	沢根村庄司山・時之子両御林木敷改め帳
八三 宝暦三年五月	中原郷蔵組の上・下両八幡は、自村へ郷蔵を移築したいと願い出る
八四 宝暦三年十一月	二宮神社は、除米を郷蔵渡しにしてほしいと願い出る
八五 宝暦四年九月	真光寺と同寺門末四か寺出入りとなるが、談議所・曼荼羅寺の取扱いで和解する
八六 宝暦五年二月	田中村の村方明細書きあげ帳
八七 宝暦六年七月	上矢馳村不作にて飢人夫食米などの貸し米を受ける
八八 宝暦八年五月	一ノ堰の水上村々と流末の上矢馳村、番水につき争う
八九 宝暦九年二月	上矢馳村で名主所に火をつけるという落書きがあり、総百姓連署して犯人の

	お仕置きを願い出る
九〇 （欠年） 巳一月 出稼ぎ人も増え	沢根町百姓共は困窮のため・つぶれ家・空家が多く他国への
	諸御用を勤めることが難儀と申し出る
九一 宝暦十二年十一月 や袈裟頭大行院	二宮神社と法道院は宮勤めのことで争うが、相川の郷宿権助
	の取扱いで和談となる
九二 宝暦十三年六月 願い出る	八幡堤の水引き方について、中原村百姓が伏樋通水は困ると
明和期	
九三 明和二年四月 付けられるが、	石名村清水寺は、本寺真光寺より越度を指摘され隠居を申し
	内済する
九四 明和二年四月 所に差し出す	中原村若一王子神社祠官矢田石見、由緒など御答書きを奉行
九五 明和二年五月 を願い出る	国仲百姓は、年貢米の五十里籠町蔵納めにつき、蔵場所変更
九六 明和三年三月	中原村の寺院と百姓は、出作百姓の分村願いに反対する
九七 明和四年一月 姓願い出る	御年貢米蔵納めにつき、江戸表への上訴も辞さないと国中百
九八 明和四年五月 に役銭を請求さ	上矢馳村名主、大石御蔵納め御用の帰路、小立村にて買い物
	れ、乱暴を受ける
九九 明和四年十一月	八幡に伝存する一揆徒党禁止に対する誓約書案文
一〇〇 明和六年十月	上八幡・下八幡村百姓は、秣場開田に反対し連判する
一〇一 明和七年三月	年貢諸割合勘定について、上矢馳村で争論おきる
一〇二 （欠年） 六月 津と修験金宝院	沢根村中山神明社の社役について、同村白山権現祠官赤塚撰
	争う
一〇三 明和八年二月 を確定する	田中村では惣百姓立会の上、天神道・馬上免道などの地境い
一〇四 明和八年十月 本郷村他の御支	河原田御蔵へ年貢米収納につき、河原田本町世話煎人は金丸
	配総代と約定を取りかわす
一〇五 明和九年八月 安永期	田中村忠左衛門は下川茂村五兵衛よりくり船用丸木を買う
一〇六 安永二年四月 港までの運送を	沢根町吉三郎ら舟仲間は、越後産廻米の沢根港より相川下戸
	請け負う
一〇七 安永三年七月	中原長福寺は門徒窪田村弥勒坊の末寺加入を願いでる

一〇八	安永三年十一月	窪田村の松・杉・桑など本数書上げ帳
一〇九	安永四年七月	市野沢実相寺は京都村雲御所に対し袈裟の拝領を願い出る
一一〇	安永五年十二月	沢根の廻船・小船・舩書上げ
一一一	安永六年六月	辰巳村新開畑反別小前帳
一一二	安永七年十月	青野村そり地の溜池御普請御入用内訳帳
一一三	安永八年四月	中原村など八か村は、雨乞いのため乙和池善龍明神に田畑を寄進する
一一四	安永九年十一月	下長木村は、御役錢継ぎ送り人足・伝馬人足などの勤め方につき、異議を申し出る

天明期

一一五	天明元年七月	田中村七人の百姓は浜方地面を取りこみ訴えられる
一一六	天明二年九月	田中村では、名主役一年廻り持ちなどの村とりきめをする
一一七	天明三年十一月	河原田藤蔵など両替屋として登録される
一一八	天明四年閏一月	東五十里・田中両村不作となり、農具・衣類まで質入れして年貢を皆納する
一一九	天明四年七月	沢根御番所・御役家建て替え人足差出しにつき、田中村は免除を願いでる

一二〇	天明五年十二月	上八幡村では凶作に備えて稗を貯蔵する
-----	---------	--------------------

寛政期

一二一	寛政二年二月	中原村は名主役を三か年任期として順番に勤めることを取り決める
一二二	寛政二年七月	国府川の波よけ破損し、修復する
一二三	寛政三年十二月	下長木村重兵衛など三人の者、作徳米・御蔵納米を不納につき、地主に訴えられる

られる

一二四	寛政六年～享和三年	沢根町廻船問屋・浜田屋の新造船「大乘丸」の船勘定帳
一二五	寛政十二年七月	金北山頂上の社殿が大破し、修復される
一二六	寛政十二年十二月	山師秋田亀次郎、同家墓地の松木伐採について西五十里村と争う

享和期

一二七	享和三年一月	石田村鍛冶屋の五組は、沢根町浜田屋から鉄材を仕入れる
一二八	享和三年	青野村生まれ無宿者久七が脱獄し、死罪となる
一二九	享和三年四月	沢根の時之子御林竹本数その他書き留め綴帳
一三〇	享和三年～文久三年	沢根町笹井次右衛門家の御宿帳

文化期

一三一	文化元年	八幡村では野犬が増え作物が荒らされ、捕獲の費用を仲間山の木を切り捻出する
-----	------	--------------------------------------

一三二	文化二年五月	窪田・五十里など六か村の麦作は、油虫のため不作となり夫
-----	--------	-----------------------------

食拝借を願いで

一三三 文化三年四月
別帳にのせてほ

一三四 文化三年九月
が、両村の郷蔵手

一三五 文化三年十二月

一三六 文化四年二月
合は諸雑用人足

一三七 文化四年九月
する

一三八 文化五年一月

一三九 文化六年六月
み詫証文を入れ

一四〇 文化六年

一四一 文化七年三月
いと願いでる

一四二 文化八年

一四三 文化十年八月

一四四 文化十年八月
争う

一四五 文化十年九月
出す

一四六 文化十年十月
し連署する

一四七 文化十一年八月
平均を以って決

一四八 文化十二年三月

一四九 文化十二年六月

一五〇 文化十三年三月
させた

一五一 文化十三年四月
のことで争う

一五二 文化十三年九月
する

る

真光寺門前百姓二〇人のうち林右衛門ほか八人は村方宗門人

しいと願いでる

大阪廻米のため石田・中原の年貢は河原田御蔵納めになる

ぜまのため河原田町内にある仮り蔵の借用を願いでる

窪田浦日付所御普請など諸入用割賦とりきめ

石川県大野浦半左衛門の船、八幡浜で難破につき、八幡浜組

をだす

五十里本郷で杉の皮がはぎとられ、盗難防止の村とりきめを

上八幡村の異国船一件箇条得心帳

真光寺村宅蔵方奉公人など四人、戸地山のシナの木を盗

る

佐渡奉行柳沢八郎右衛門、真光寺境内に"エイ"鶴碑を建立する

石田村甚五右衛門は、酒造りのため石田川の堰より取水した

河原田本町柳屋・河崎屋の中原神社鍛冶町能見物入用覚え

沢根炭屋町・窪田村荒川橋架け替え工事の諸雑費入用勘定帳

金北山権現社人出雲と同社別当吉祥寺は財産・賽物のことで

二宮村ほか六か村は、御林の手入れについて御返答書を差し

二宮村の若者連中は何事も相談をもってとりきめようと衆議

沢根村ほか四六か村は、石代値段を相川および在方三か所の

定してほしいと願いでる

長木三か村はこの年懸案の溜池を作る

田中村・五十里籠町の鎮守白山権現社地書きあげ

五十里本郷本福寺は離檀の者に祠堂金として一〇貫文を納め

真光寺村与四兵衛は同村祖右衛門など五人のものと用水溜池

長木三か村は若宮八幡社の修復費用のため村仲間田地を寄進

一五三 文化十五年四月	中原村は野畑のうち稗植付けの場所を田成りに見立てられ困
惑と願い出る	
文政期	
一五四 文政二年八月	窪田村・五十里簗町・田中村の漁師が漁場や漁期などを取り
きめる	
一五五 文政二年十二月	沢根村の御林人足など高掛り諸役が減免となる
一五六 文政四年五月	奉行所からの水替え人足差出しの命に対し、国仲一三か村惣
代は御免願いを	
	提出する
一五七 (欠年) 七月	京都醍醐三宝院御門跡より金北山神社へ桃燈寄付につき、寺
社奉行よりのお	
	尋ね
一五八 文政五年四月	沢根・窪田など七か村は、長崎無宿者の継送り人足役宥免を
願い出る	
一五九 文政五年十月	田中町矢嶋主計は水車の取水を野田江子衆中へ願いでた
一六〇 文政五年十一月	沢根町浜田屋の廻船・伝馬船・舵用真木などの売買覚書き
一六一 文政六年八月	沢根炭屋町の四十物師四人のものは、月々の書上げをおろそ
かにし、詫一札	
	をとられた
一六二 文政六年八月	河原田田町の小前二二人のものは、水難防止のため石田川の
川幅拡張を願い	
	でる
一六三 文政六年	中原村は、江浚いの揚土砂除去につき御上の御手当を願いで
る	
一六四 文政七年四月	窪田浜に防風・防砂のため松の植樹が行われる
一六五 文政七年十一月	沢根町は名主給・諸役勤め方などの取り決めをする
一六六 文政九年二月	沢根・西五十里・田中三か村は、八両を積金し利子で神事能
を行う	
一六七 文政九年九月	田中村など三か村の石工は、石の切り出しについて村役目所
へ一札を入れる	
一六八 文政九年十一月	中原村など組合五か村は、御金宰領役人賄い・触飛脚賃ほか
諸雑費割り方に	
	ついて合意する
一六九 文政十年十二月	中原・窪田・石田三か村は年貢米を従来通り河原田御蔵納め
にしてほしいと	
	願いでる
一七〇 文政十一年十月	国中の四十物師が四十物商売について取り決めをする
一七一 文政十二年十月	石田村清次郎の酒造道具改書上帳
天保期	
一七二 天保二年九月	中原村は、諏訪町にある若一王子神社除地に郷蔵建築を始め

るが、同社鍛冶

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| 一七三 天保二年十二月 | 町氏は反対する |
| いで田中村忠左 | 沢根五十里に住んでいた仏師長慶が、金箔の仕入れの手ちが |
| | 衛門より借金をする |
| 一七四 天保三年七月 | 真光寺村郷蔵番人不調法につき、村役目所へ詫を入れる |
| 一七五 天保三年八月 | 真光寺村某は、ばくちなどのため銀山より借金をし、村方へ |
| 詫を入れる | |
| 一七六 天保七年一月 | 沢根炭屋町の四十物師孫兵衛は、二〇貫文を借りて小船を建 |
| 造する | |
| 一七七 天保七年七月 | 山田村白山大権現へ寄進の柴山二か所について氏子一同取り |
| 決め一札 | |
| 一七八 天保七年八月 | 能登珠洲郡の惣兵衛船宝順丸は暴風雨にあい、八幡浜で破船 |
| する | |
| 一七九 天保八年七月 | 沢根炭屋町の四十物師某は、獺船・大釜を抵当に借金をする |
| 一八〇 天保十年九月 | 上八幡村庄次郎母、観音堂へ灯明畑を寄進する |
| 一八一 天保十年十一月 | 中原村に住む百姓は四軒しかなく、諸人足役は勤め難いと免 |
| 除願いを出す | |
| 一八二 天保十一年八月 | 青野・中原両村は村境いにつき争論となるが、論所を等分す |
| ることで合意す | |
| | る |
| 一八三 天保十三年一月 | 青野村ほか五か村組合の村取締り帳 |
| 一八四 天保十三年五月 | 山田村石橋山御林根伐り人足二人、不都合にて詫一札 |
| 一八五 天保十三年八月 | 河原田諏訪町権兵衛は、畑地を田地に変更したいと願い出る |
| 一八六 天保十三年十一月 | 河原田の田町浜通りに畑三反五畝が開発される |
| 一八七 天保十四年九月 | 八幡五か村は助合穀御蔵をたて、以後の運営について取り決 |
| めをする | |
| 一八八 天保十四年十一月 | 真光寺村では助合穀割賦を家棟・人数割から高掛り割に改め |
| る | |
| 一八九 天保十四年十二月 | 河原田・沢根の漁師は引網漁について大須・渋手村漁師と争 |
| う | |
| 一九〇 天保十五年五月 | 中原長福寺の乙和池祭礼のため、青野ほか組合村方より七七 |
| 貫文を寄進する | |
| 一九一 天保十五年十二月 | 青野・山田両村は阿弥陀堂念仏講の基金として四五貫文を寄 |
| 進する | |
| 弘化期 | |
| 一九二 弘化二年二月 | 河原田の来迎寺は、中原村長福寺へ末寺加入を願い出、門末 |
| 諸寺これに賛成 | |
| | する |
| 一九三 弘化三年五月 | 五十里炭屋町源之助は小船を新造し、御焼印札を願い出る |

一九四 弘化四年二月 立合いのうえ境	上八幡村・下八幡村は鍛冶町屋敷境江尻の場所に双方の村役 をきめる
一九五 弘化四年八月 役人見廻り覚書	鶴子にて大砲鑄造開始につき、御用旅宿田中村斎藤作兵衛の き
嘉永期	
一九六 嘉永元年七月 願い出る	中原村鴨ずり堰の江子一同は、新規の樋による取水は困ると
一九七 嘉永二年八月	中原若一王子神社再建棟札
一九八 嘉永三年二月 などを供出する	沢根番所の扱下村々は、役家諸入用として人足・むしろ・縄
一九九 嘉永四年二月	国中四十物師・干物買い惣代が御役銭上納をお願い出る
二〇〇 嘉永四年四月	紺屋権兵衛の沢根町青野屋半五郎あて藍玉借用証文
二〇一 嘉永四年十二月 争論となり、和	中原村にて能太夫右近弟西之助と脇師遠藤藤九郎が酒の上で 解する
二〇二 嘉永五年三月	宗門改めにつき、中原村青柳寺の奉行所あて宗帳手形
二〇三 嘉永五年五月	真光寺村は牛頭天王祭礼日を六月七日に改める
二〇四 嘉永六年六月	上八幡・下八幡両村組合が八幡堤の修復工事を行う
二〇五 嘉永六年七月	中原村は早ばつのため凶作となり検見をお願い出る
二〇六 嘉永六年十一月 いて取り決めた	四十物師組合は沖買・せり買いの禁止、鮮魚の価格などにつ する
二〇七 嘉永七年四月 を出す	沢根宿場中使の居宅類焼し、田中・沢根両村は修理の助成金
二〇八 (欠年) めがなされた	二宮村では長百姓、本百姓、間人など座席順について取り決
安政期	
二〇九 安政二年六月	御用御荷物継ぎ送りについて沢根など組合村々とりきめ
二一〇 安政三年九月	中原若一王子神社能舞台再建棟札
二一一 安政四年	沢根村の小前百姓は、長百姓身分について異議を申し立てる
二一二 安政五年五月	中原村は御巡村人足・御宿組合の組替えをお願い出る
二一三 安政五年九月	河原田五か町の重立身分並に席順書上げ帳
二一四 安政六年三月 が来島する	石田の獅子ケ城跡に屯所が置かれ、新発田・高田より警衛兵
万延・文久・元治期	
二一五 万延元年七月	沢根村は二年つづいて不作となり御困糶を拝借する
二一六 万延元年七月 村の漁師に乱暴	西五十里村の嘉左衛門など四人の漁師は、烏賊漁場にて稲鯨

二一七 文久元年六月 き借り受け販売	され番所へ訴える 河原田諏訪町の三重郎ほか、羽茂本郷鍛冶職市郎兵衛の稲扱
二一八 文久三年三月 賄い費を出銭し	につき一札を入れる 高田藩兵が沢根の大乗寺・満行寺などに分駐し、村々はこの
二一九 文久三年四月	た 沢根村へ五一人の農兵差出しの御沙汰がくだる
二二〇 文久三年五月 を負担する	農兵の鉄砲訓練が行われ、沢根など一六か村組合はその雑費
二二一 文久三年九月	中原村は助合穀の詰替え延期を願い出る
二二二 元治元年八月 慶応期	五十里本郷矢嶋作兵衛の四十物積み出し立銭書上帳控
二二三 慶応三年四月	この年真光寺村円満坊が寺家より末寺格に昇格する
二二四 慶応三年十一月	鶴子間歩取明御普請諸品物納め通い帳
二二五 慶応三年	二宮村阿弥陀堂組は村仲間山一か所を寄進する
二二六 慶応四年二月 稼ぎをする	石田村の市兵衛鍛冶は、借金のため羽茂本郷市郎兵衛方へ出
二二七 慶応四年五月	五十里竈町児玉茂右衛門家の年中家風式例誌
二二八 (欠年) 九月	真光寺住職快弁死亡し、石名村清水寺住職賢理が後住となる
二二九 (欠年)	真光寺住職帰国について、京都醍醐三宝院より先触れが出さ
明治期	
二三〇 明治元年十一月	河原田御役所御用達・河原田町年寄高橋又兵衛御用書留